

# 末法の世の聖人たち

瀬戸山ひろ

「今昔物語集」《巻19の3》「内記慶慈の保胤出家せる語」には次のような話載っています。

陰陽師賀茂の忠行という人の子で「慈悲ありて」「身の才」優れたものがいた。年をとり出家をし内記の聖人と呼ばれた。空也聖人の弟子となって世の人から責ばれたが、いろいろエピソードの多い人だった。

その1、播磨の国で寄進を受けて寺を造ろうとした時のこと、川原で「法師陰陽師」が「紙冠かみこうぶり」をつけて袂たもといいをしている現場に行き会う。これを見た内記の聖人は陰陽師につかみかかって紙冠を引き破り「仏の弟子になったというのに陰陽の袂たもといいをするとは何事か」と大泣きをする。やがて陰陽師が、生活のために仏の禁を破って袂たもといいをしていると知るや、寄進された物をすっかりこの法師に与えてしまう。

その2、東山の如意寺にいた頃のこと。さる貴人から招請があり馬に乗って出立した。内記の聖人は草を食べたがる馬の気持ちに任せのんびりと進む。舎人がじれったがって馬のお尻をむち打ったところ、舎人につかみかかって「この馬は前世から輪廻を繰り返した我が父母となっている馬ではないか。」と言って大声で泣き叫ぶ。

舎人は内心おかしいことと思いながら泣いている聖人が気の毒で謝罪をする。

その3、続いてのこと、道端に朽ちた卒塔婆そとつぼが倒れている。これを見るや「手迷いてまど」をして馬から下りて身繕いみつくろいをし卒塔婆そとつぼに向かって泣きながら額かぶが地につくほどに何度も何度も礼拝をする。その後も卒塔婆を見る度にこの礼拝を繰り返すので普通なら2時間でいける道を11時間もかかった。舎人は「二度とこの聖人のお供はしたくない」と言う。

その4、冷えておなかをこわしてしまった時のこと。老犬を前に便所で涙を流しながら

ら「御前は前世の報いで犬になっている。だから私の排泄物を当てにして生きているのだ。しかし前世で私の父母となっているのをほおっておくわけにはいかない」と翌日、筵の上にごちそうを並べて犬に食べさせる。聖人はこの様子を見てうれし泣きをする。

この「内記の聖人(?-1002)」は、法名「寂心」、俗名は「よししげのやすたね」といい、詩文の才能で知られた貴族でした。広辞苑や百科事典にも登場する歴史的人物です。若い頃は比叡山で「勧学会」というものを創り、天台宗と漢文学（白居易）を結びつけるような活動をしています。「日本往生極楽記」という日本初の往生譚を著し、その中で悪人往生を述べ、親鸞への影響も与えたといえます。また、彼のもう一つの著書「池亭記」は鎌倉時代前期、鴨長明に影響を与え、かの「方丈記」を生ぜしめているそうです。日本の仏教史上欠かせない人であったようですね。

何より「今昔物語集」の典拠の一つでもあるという「日本往生極楽記」を書いた人物だから「今昔」の編集者にしてみれば尊敬すべき聖人です。ただ、それにしても、締めくくりの言葉がありきたりであるのは不思議です。奇行をあれだけ詳しく述べておいて

「<sup>さと</sup>知り深く 道心盛りにして 止む事なかりけりとなむ 語り伝へたるとや。」とだけ結ぶとは、評価があっさりしすぎているような気がするがなぜでしょうか。思うに、確かに尊敬すべき人物であるが、あまりに内記の聖人が孤高であった故に、「今昔」当時の仏教界からも理解しがたい遠い雲の上にいるような人だったのかもかもしれません。

さて、読めば読むほど、この《巻19の3》で描かれた内記の聖人のあり様は、オーバーで、繊細、かつ激しやすいのです。何処が長所で聖人なのか、私には理解できませんでした。そういえば、この聖人の理解しがたさは、あの「増賀聖人(917-1003)」(「銀のしずく4号」を参照してください。)に似通うものです。関連があるのかな、と調べてみたら、この人は986年、比叡山<sup>よかわ</sup>横川の源信のもとで出家し、この横川で増賀から「<sup>しかん</sup>止観」(仏教の瞑想法の一つ)を学んだということが分かりました。つまりあの奇僧、増賀の弟子であったのです。増賀聖人の行動を「今昔」で読んだ時、か

なり特異な人と感じましたが、増賀聖人だけが特別な存在だったわけではなかったのです。つまり、平安時代には二通りの僧のあり方があったのでしょう。

一つは時代の権力者の庇護を受けて、名声を得ていく僧達。これが仏教界の表街道を行く僧達です。往生極楽を願う貴族世界に近く、護持僧となった人たちのグループでもあります。

今一つは増賀や内記のようにわざと俗世を離れて、修行一筋に生きる僧達。どちらかということも山岳宗教的仏教者。権力者の言うことを後回しに出来るほど無礼でもあり、我が道を行く僧達でグループは作りません。

平安時代の僧達は、この両者を両極端にして、名声（出世）と三宝（仏心）の間を行ったり来たりしていたのではないのでしょうか。

仏教は日本に入った時、まず貴族の間に広がりました。奈良時代の仏教は仏典（漢文）を読むことが出来るような教養を持ち、生活にゆとりのある人の間に広がったはずですが。聖武天皇は全国に国分寺を建て、国家安泰を祈願したと歴史で習いましたが、建物や仏像の壮大さで民衆を驚かす事は出来ても、仏への信仰心を浸透させることは難しかったようです。貧しい庶民には仏教は外来物であり遠い存在だったと思います。また、僧になるのも簡単ではなかったようです。国の試験を受けて公認され、「<sup>どしゅ</sup>度者」になることが必要だったようです。「今昔」で見ると、《巻11の32》で田村の將軍は、山中で知り合った賢心という私度僧（官許を得ずに密かに得度した僧尼）を「**度者一人を給りて**」（その年度の僧の定員枠から一人分を頂いて）僧にしています。お金のかかる出家に定員枠、これでは仏教は庶民の間に広まらなかったでしょう。

平安時代になり、藤原氏が権勢を誇る頃、仏教はどんどんお金がかかるものになっていきます。この世は不安が多く、思うように生きられない。あの世での平安を願い、伽藍を建て金箔の仏像を建てたが、相変わらずお金持ちのための仏教だったようです。出家しても生きていかれるだけの保障がないと女三宮も尼にはならなかったでしょう。中には僧となって金儲けをたくらむ者もいたのです。例えば《巻19の20》

には、「大安寺の別当」(寺院の事務 管理をする僧)という人が登場し、彼には妻も娘もいて、家族で寺の物を私有化している様子が描かれています。また、この場面には当時の寺の俗化批判が読み取れるので、これが特別な例ではなかったようです。

特に、護持僧(天皇個人の安穩のために加持祈禱をする僧)は天皇の側近くにいるわけで、僧侶としては最高の名誉でした。貴族出身の僧は争って護持僧になりたがったようです。

護持僧の一人に**良源(912-985)**という天台座主ざすがいます。彼は「今昔」に何回か登場していますが、横川に住み比叡の堂塔を復興させ、規律を整備した「中興の祖」として今でもあがめられています。弟子も3000人いたといひます。この良源は増賀や内記の先生筋にあたる僧ですが、藤原氏から格別の籠を受け、特に藤原の師輔もろすけ(道長の祖父)の援助を受けたことで有名です。生産の手段を持たない仏教界は、なんとしても時代の政権の庇護なしには生き抜いて行かれなかったでしょう。責めることは出来ません。また、良源の教えは源信に伝えられ、この源信の流れから親鸞が登場するのだから、この僧達も優れた人々であったと思われます。

このような脚光をあびて生活する僧の集団を「表街道」の僧というなら「裏街道」を歩き続けたのが、先の増賀聖人であり内記聖人です。二人とも比叡山に入り修行し才を表しました。二人とも貴族階級の出身であったために藤原氏から優遇される立場がありました。しかし彼等はこの傘の内から飛び出していくのです。増賀聖人は、良源が大僧正になった時には、「牝牛に乗り干し鮭を太刀にはく」という異装で抗議の意を表したという話は有名です。(「増賀聖人行業記絵巻」)増賀聖人にとって良源座主は先生ですが、この先生が権力に身をゆだねて行くのを許すことができなかったのでしょうね。

彼等は進んで山に籠もり、厳しい修行を自らに課して法華経を読む「持経者」となりました。この裏街道型の僧の特徴として、貴人から加持祈禱を頼まれて参上するが、その都度周りのものが困惑する場面が多く描かれます。裏側にいて厳しい修行に耐える僧は、普通ではとてもマネが出来ない世界だと表街道からあがめられ、おまけに権

力と結ばれていないので相手が誰であろうと怖いものはない。表にいるものはそれが分かっているからハラハラするのです。尊敬されながらも、何をしでかすかわからない僧として、世俗の僧からは迷惑がられてもいます。

この裏街道を歩くのに迷わなかった僧が、他に二人ほど「今昔」に登場しました。《巻12の34》に出てくる書写山の性空聖人(917-1007)と、《巻12の3》に出てくる神名の睿実(?-?)です。かの増賀・内記と同じく天皇(上皇)の病気の加持祈祷に招聘された性空は「我大魔障に値たり。助け給へ、十羅刹」と声を挙げて叫びて、木蓮子の念珠の砕く許揉みて、額の破る許額を突て、七八度許突きおわりて、臥し丸び泣く事限りなし。」という具合に、激しく拒絶しますこれまた実にオーバーです。これを予想していた勅使は、命がけで性空を呼びに行ったと書いてあります。ただ、この奇行にもかかわらず性空聖人は源信から尊敬されたという話も載っているのが理解しがたく面白いです。

また神名の睿実は太政大臣に招聘されて、「極めて風の病の重く候へば近来蒜を食てなむ」といったんは口実をつけて断ろうとします。また天皇の物の怪による病を直すように請われて行く途中、流行病にかかり捨てられた女を見つけて介抱し「内裏には睿実只今参らずとも止ん事無き僧達多く候ひ給へば何事か候はむ」と天皇の病気治癒を後回しにするほどの強気ぶりでした。また、天皇から僧綱(層尼の監督僧)の位を授けられる時も「固く辞して逃げるが如く」退出したともあります。

いずれも僧なら最高の荣誉であるはずの護持僧となるのを嫌っている姿が描かれているのです。この増賀・性空・睿実の3人が「今昔」の中で、前後して《巻12》に出て来るのも、同じ裏街道の僧として筆者が捉えていたからでしょう。

やがてこの裏を歩いた僧達は、その修行の過程から日本元来の「神」「霊」と強く融合し、「修験者」「山伏」となっていったのではないのでしょうか。漠然とそんな事を考えていた頃、壇上先生から「増賀聖人は山伏の姿と重なる」と言われ、すつと心に落ちるものがありました。

さて仏教の歴史にもどります。文献をあさっていたら**空也聖人（903-972）**が「<sup>いちのひじり</sup>市の聖」として出て初めて仏教が庶民の世界へと広がっていくという説明がありました。不思議なことに、この空也は「今昔」の中では第三者としての登場はあるが、主人公として登場していません。内記聖人の先生である空也は出自未詳ですが、諸国遍歴をし、道路・橋梁・灌漑など社会事業を多く手がけた僧です。貴賤を問わない口称念仏の仏教を広めたのだそうですが、この人は先に述べた表裏のどちら側とも言いにくく、中世仏教につながる新しいタイプの僧のような気がしました。

では、空也聖人が出るまで、平安前期の庶民は心の平安をどこで得ていたのでしょうか？これが「御霊」や「神」だったのではないかと考えます。これまで私の心象風景に、平安時代の庶民が仏像に向かって礼拝している姿がありましたが、実はこれは平安も終わりの頃の風景で、長く「仏」は一部の貴族向きのハイカラな世界に過ぎず、庶民は仏像を遠巻きに見ていることがほとんどであったと思います。字も読めず暇もない庶民は外来の「仏」よりは先祖代々の「御霊」や「神」の方によほど親近感を抱いていたに違いありません。

空也が出てやっと「仏」は庶民の心の中に浸透し始めました。つまり「今昔物語集」は、「神」と密接に暮らしていた庶民を対象に、「仏」の信仰を広く伝える目的で書かれたと思われます。この書物の中で「神」が「仏」を護るものとして登場するのは神仏の両立なくして庶民に「仏」の信仰が入っていかなかったからでしょう。

この後、表街道の僧達は、神・霊と袂を分かち、新しい仏教の源を創り出し、裏街道の僧達は、神・霊と濃密な関係を保ち続け、修験の路に入っていきます。

400年にわたる平安時代は、そんな時代だったのだと私流に納得することができました。

#### 参 考 文 献

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 「平安時代の信仰と生活」山中裕 鈴木一雄編 | 至文堂（平成6年発行）          |
| 「今昔物語集本朝部上」池上洵一編      | 岩波文庫（2002年発行）        |
| 「今昔物語集一」馬淵和夫他         | 小学館日本古典文学全集（昭和46年発行） |